

復活のイエスとは？

(ルカ二四・一三～三五)

ある神学生がスーパーで「イースターおめでとう」と書かれたシュークリームを見つけたことをSNSで報告していた。驚くべきは the Resurrection of Jesus Christの文字が躍っている事。訳せば「イエス・キリストの復活」である。立派な信仰告白だ。他方NHKのニュース番組では「キリスト教の復活を記念して」というコメントがあった。「キリスト教、死んでないし」と突っ込みみたくなったのは私だけではないようだ。苦笑。

閑話休題。このように日本でもポピュラーになってきたイースターであるが、最初のイースターは寧ろ「祭りの終わり」の静寂から生まれた。ユダヤ人の過ぎ越しの祭りに合わせて上洛(ー)されたイエスは、その祭りの最後に合法的に殺され、イエスの追従者は散り散りに逃げて行った。その二人の後ろから静かな声が聞こえてくる。それが今日の物語、「エマオの途上」である。以下復活のイエスについて三つの事を学びたい。

一、「共に歩かれる」お方

イエスという希望を失った弟子たちは、

それでも「あの方」のことを忘れられなかったのか、一連の出来事について語りあっていた。その時彼らの後ろから復活のイエスが近づく。何気なく、さりげない接近だ。イエスは落ち込む彼らに歩調を合わせ、そして何を話しているのかを尋ねる。彼らは堰を切ったように事の顛末を語り出した。自らの希望であったイエスの力強さとその悲劇的な結末、更には死体が無くなってしまったことなどを一気にまくしたたてた。聞いているのはイエス本人だ。それを打ち消すことも出来たろう。しかし彼はなおも耳を傾け、聞き続ける。つかずはなれず、ちょうど良い距離で歩かれる。復活の主とはそのようなお方なのである。

二、「喝破する」お方

このように傾聴するイエスの姿にカウンセラー、ことに非指示的なカウンセラーの姿を重ねる人は多いのではないか。しかしイエスは問題を話しさえすれば、その人の根源的な問題は解決するなどと考えなかった。寧ろ十分に距離を詰めた後、これは言った。「愚か者」と一喝したのだ。そして彼はイエスについてこう語った。「キリストは必ずそのような苦しみを受けて、それから彼の栄光にはいるはずではなかったのですか(二六節)」と。更に彼は救い主イエスについて聖書に基づき、丁寧に彼

らに教えたのである。イエスは彼らに必要なものは「寄り添い」だけでは十分でないことをよくよく知っておられた。だからこそ、優れたカウンセラーパンチャーのように彼らの心に一喝を与えたのである。それは荒療治かもしれない。しかし「苦難を通して栄光の復活に入るイエス」のみが彼らの人生を結び合わせる糸であることを、イエスはよくよく知っておられたのである。

三、「いのち」を分け与えるお方

名もなき通行人の教えは彼らの心を燃やした。失われた感覚が戻って来たのである。かつてあのお方から聞いた希望、よこび、そして聖なる好奇心が、エマオを越え、更に旅を続けようとする男を引きとめる。引きとめた以上パンを裂くのはこの「謎の教師」の役目。男はパンを取って祝福し、それを裂いて彼らに渡された。その時彼らの目は開かれた。そこにあった手は夕暮れのガリラヤ湖で五千人を養ったあの手ではないか。その声は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と語ったあの声ではないか。そして裂かれたパンは文字通り「いのちのパン」ではないか。その瞬間、復活のイエスは見えなくなる。そこには復活のからだの神秘がある。しかしそれ以上に大切なことは、

この遭遇を通して、失意の弟子たちには希望が与えられたということであり、その希望はキリストの復活のいのちから来るということなのである。

* * *

「トラ・トラ・トラ(我奇襲二成功セリ)」真珠湾攻撃の航空隊長、淵田美津雄中佐が打電した暗号である。しかし華々しい戦果は最初だけ。工業力競争の様相を呈する総力戦に小さな島国がかなうはずもなく、無条件降伏によって戦争は終わった。負けたのだ。淵田の心は荒んだ。当然である。軍人なのだから。そんな時彼は捕虜収容所へ入信した部下を通じてキリスト教に出会う。聞くとこの捕虜を世話したのは何と両親を日本兵に殺された白人女性だと言う。彼女は日本人への恨みをキリストのいのちと教えによって克服し、遂にはこの捕虜の青年の心に火をつけたのだ。「憎しみが愛に変わる。こんなことが起こり得るのか」と言つて淵田は聖書を読み、真理を求めた。そして同じことが彼にも起こった。以来キリストのいのちに与った彼は一九六六年に召されるまで日米で伝道活動に従事した。主のいのちに触れるなら人は生まれ変わる。いのちの主を心からほめたたえようではないか。